

◆ 第九話

ひ び たい じ
猩 々 退 治

(昭和30年1月20日掲載)



豊前の国守実の里の大歳祖神社の祭礼の時には、五穀豊穡の為と称して、人身御供に娘を捧げるのが、毎年の習慣になっていました。

ある年、顔かたちも姿も美しい一人の娘が、人身御供に選ばれました。両親は一人娘の事で、蝶よ花よと育てて目に入れても痛くない程の育て方で

したので、その嘆き悲しみようと云ったら有りません。何しろ神のお告げと称する白羽の矢が、その家につき立ったのですから、仕方がないのです。村人も気の毒に思いましたけれども、若し娘を人身御供にしなければ、神の怒りに触れ、村はキキン（飢饉）に襲われると言われてい

ますので、どうする事も出来ません。

月日の立つのは早いもので、だんだん祭礼の日は近づいてきます。年頃の娘を持つ村人たちは、この難題から脱れた事について、しばし安堵の胸を撫で下ろして、いそいそと祀りの準備をするのでした。

そのころ、岩見の国の人で重太郎と云う、武者修行者がこの村にやって来ておりました。娘可愛さのあまり、両親は神の祟（たた）りも恐れず、或る夜こっそりと一部始終を物語り、娘の命を助けて下さる様に頼みました。

「人間の命を救うはずの神様が、逆に人命を奪う道理はない、それはきっと妖怪変化の仕業に違いない」

と言って、重太郎は快くこれを承知しました。

祭典の当日がいよいよやって来まして、官司をはじめ、多（大）勢の人々が神社の境内に集まりました。村人たちは、本当に妖怪変化の仕業であるかどうか、半信半疑でぞくぞくと集まって来て、近年に無い大にぎわいです。

「わしは塚原一刀斎卜伝の弟子で岩見重太郎と言うものだ。今日こそ妖怪変化を退治して、村人の難儀を救おうと思っている」と所信の一端を述べました。腰には兼光の名刀を一本差し、白装束の勇ましい、出で立ちです。人ごみの中から一人の獵師が現れました。

「私は鶴坂の獵師ですが、今日の晴れの舞台に少しでもお役に立てば幸いと思い、犬を加勢に連れて来ました」と言いました。見ると、犬王丸と太郎丸です。

重太郎は、昔は獵師で犬を馴らしていたので非常に悦びました。村人は二匹の犬が現れた事をどんなにか心強く思った事でしょう。野や山で、どんなに勇敢でどう猛であるかと云う事を知っていたからです。

娘は自分の身代りになってくれる重太郎の仕度を、涙に暮れながらも甲斐甲斐しく手伝っていましたが、最後に自分が丹精込めて作った、緋ちりめんの羽織を重太郎にそっと着せた時には、今生の別れかも知れないと思い、娘の胸には切ないものがあつたでしょう。

いけにえの唐びつを神前に安置し、厳かな祝詞奏上も終わり、みんな最後の引きとりを宮司が宣しましたので、村人は勿論の事、両親も娘も泣く泣くみんな一旦解散したのであります。しばらくすると、生臭い風が吹いて来て神前の灯がぷつりと消えました。

するとどうでしょう、身の丈、一丈もある大きなひひが現れたではありませんか、顔は真っ赤で、眼光は光り輝き耳まで裂けた口から火を吐いています。人の居ないのを見定めると、唐びつの蓋を開け、娘の晴着を見て「ヒヒヒヒ」と悦びの声をあげた時です。重太郎は躍り出ました。それと同時に犬王丸と太郎丸も飛び出しました。

おごりに馴れたひひは、よく見きわめもせず、娘だと思ったのが間違いした。一太刀重太郎から切りつけられ、犬王丸、太郎丸から足と手をかまれたのでした。然しそれ位の事で、一遍に参るようなひひでは有りません。重太郎の獅子奮迅の戦いを扶（たす）けて、犬王丸、太郎丸も大活躍です。一刻あまりもかかってとうとうひひを退治してしまいました。

岩見重太郎は再び集まって来た村人に「ひひを無事退治する事が出来たのも、犬王丸、太郎丸のお陰だ。若しこの名犬の加勢がなかったら自分は殺されたかも知れない。全国まれに見る名犬である。この犬が死んだら、堂を建てて手厚く葬るように」と言い、いくばくかの金を獵師にこつづけました。それから両親や娘の別離の悲しみをよそに、村人に別れを告げた岩見重太郎は漂々として旅に出ました。(完)